

Present State of Conservation, The Economic and Environmental Values of Mangrove Forests and their Present State of Conservation in the South-East Asia/Pacific Region 135~177 pp. 10) Gan Boon KEONG (1996) A Working Plan for the Matang Mangrove Forest Reserve Perak, the State Forestry Department of Perak Darul Ridzuan, Malaysia 215 pp. 11) H. Jack RUITENBEEK (1991) Mangrove Management : An Economic Analysis of Management Options with a Focus on Bintuni Bay, Irian Jaya 51 pp. 12) 日本貿易振興会 (1970) インドネシアの林業に対する外国資本投資の手続指針 152 pp. 13) 金 才賢 (1995) インドネシアにおける森林開発企業の展開と森林資源利用, 222 pp. 14) 増田美砂・森田 学 (1981) インドネシアにおける森林開発の展開, 京都大学部附属演習林報告 第 53 号 pp. 105~115 15) 井田篤雄 (1998) インドネシア国マングローブ林保全開発現地実証調査について, 熱帯林業 No. 41 pp. 60~66

## 図書紹介

◎マホガニーの造林学 (MAYHEW, J.E. & A.C. NEWTON, 1998. The Silviculture of Mahogany. CABI Publishing, CAB International, Oxon, UK, Email : cabi @ cabi.org, 226 pp., 価格未詳)

第 2 章の冒頭に、マホガニーという名前は西アフリカのヨルバ語に由来するとする説が書かれていて少なからず驚いた。つまり本来は、アフリカに分布する同じセンダン科の *Khaya* 属の樹木に用いられたという説であるが、疑義を表明する学者もいるらしい。*Swietenia* 属は、*S. macrophylla*, *S. humilis*, *S. mahagoni* の 3 種から成るが、互いに交雑しやすく、天然分布が重なっている所では識別が難しいという。本書は 14 章で構成されている。1. 緒言, 2. 種の特性, 3. 植栽樹種としてのマホガニー, 4. 種子生産, 5. 育苗技術, 6. 適地, 7. 植林, 8. 植栽地の管理, 9. 成長と収穫量, 10. 材質, 11. しんくいむしの防除, 12. 保護, 13. 更新体系, 14. 結論で、このあとに私信、文献のリストがあり、末尾の付録には、マホガニー林分の間伐様式、「胸高直径-樹冠直径」にもとづくマホガニー林分の蓄積、マホガニー林分の単一蓄積調査、マホガニー林分の連続的蓄積調査、マホガニー林分の収穫表、マホガニーの材積表の 6 項が収録されている。*S. macrophylla* については、LAMB (1966) 「Mahogany of Tropical America : Its Ecology and Management」という著作があるらしいが、すでに 30 年以上を経ており、また天然林の生態と管理に焦点がおかれていた。この後の研究に 2 つの局面があり、1 つは CATIE における 1970 年代の研究で、人工林造成の最大のネックであるしんくいむしの防除である。一方ずっと最近には、天然林のマホガニー開発に関心が寄せられており、危機に瀕する樹種として、天然林における生態が見直されている。このような事情を背景に、各章の項目にみられるような総説が試みられた。(浅川澄彦)